



市民性教育を軸とした CLD 青少年サポート

特定非営利活動法人アレッセ高岡 青木 由香

活動の背景

NPO アレッセ高岡が活動の拠点としている富山県では、2024年1月現在、外国人住民数が2万1,917人（総人口比2.2%）と過去最多人数を更新しました。家族帯同でやってくる子どもたちも増え続け、この20年間で県内の学校に通う外国籍の子どもたちの数は3倍以上となりましたが、日本語指導が必要な児童生徒は県内に散在し、子どもたちに必要な支援体制が整えられてきたとは言えません。そのような中で、当団体は学校外でも子どもたちを支えようと、学習支援教室の実施（コロナ禍以降は対面だけでなくオンラインによる支援も開始）や子育て・教育・キャリアデザインに関する多言語資料の作成・配布、高校進学説明会の開催（他団体や教育委員会と協働）などを進めてきました。



対面学習支援の様子

ジレンマ

しかしながら、マジョリティからの圧倒的な同化の圧力に「どうせ」「私なんか」と萎縮してしまっている子どもたちを見て、目の前の定期考査や高校受験で「うまくいく」ことばかりを目標に掲げた支援に、ジレンマを感じるようになりました。私たちは、子どもたちが持っている母語や母文化の力を、活かすどころか失わせることに加担してしまっているのではないかと。このまま既存の日本のやり方（評価）にのっとなって「うまくいった

としても、それは子どもたちが本来持っている力を最大限に伸ばして輝いている姿と言いきれるのか。一方で、教育現場も地方経済もコミュニティーも、既存のやり方を踏襲し続けるだけではうまくいかず、疲弊し、希望を見出せなくなっている。新しい時代の中で変わっていかなければならないのは、この時代に生きる地域のすべての人＝私たちなのではないだろうか――。

「市民性教育」との出会い

そんなモヤモヤした気持ちを募らせていたときに会ったのが「市民性教育（Citizenship Education）」という言葉でした。他者と共により良い地域の未来を築いていく主体としての「市民」をどう育ていけるのか、富山県の文脈の中で考え、事業を見直し、プログラムを考えていきました。もちろん、CLD（=Culturally and Linguistically Diverse：文化的にも言語的にも多様な）青少年を中心におきつつ、日本人も外国人も大人も子どもも、すべての地域住民が対象です。



高校生による映画制作ワークショップの様子

地域の歴史・文化そして「常識」を深く見詰め、クリティカルに見る各種ワークショップ、多様な年代やバックグラウンドを持つ人々が互いのキャリアプランを共有したりSDGsの課題解決の方法と一緒に考えてプレゼンテーションしたりするイベント、異なるもの同士の化学反応をアートを通して表現するフィルムフェスティバ

ルやアート展、CLD 青少年が調査員となって県民の学びのニーズ調査を行い、多様な学びの選択肢を富山県に創造するため、新田八朗知事に提言するなど、いろいろなことを進めてきました。



CLD 調査員による「学びのニーズ調査」会議の様子



CLD 調査員による新田八朗知事への提言書提出

また、市民性教育事業の一つの軸には、地域課題への取り組みとして「防災」を掲げているのですが、昨年度は地域に住むパキスタン人の若者を講師に迎え、イスラム教徒の人とともに避難所生活を送ることになったときの対応などを一緒に考え、参加者みんなでハラールの非常食を試食したりしました。2024年1月1日の能登半島地震では富山県も大きな揺れを経験し、幸いなことに身近には死傷者や長期の避難生活を強いられた人はいませんでしたが、このときほど、日々の防災の取り組みの大切さが身に沁みたことはありませんでした。



防災訓練の様子

共に成長し、共につっていく

異なる視点や考え方、行動は、時に人を不安にさせるし、ぶつかって嫌な思いをすることもありますが、物事がスムーズに（しゃんしゃんと）進まずにもどかしく感じることもあると思います。でも、そこから目を逸らさず、逃げたり排除したりせず、希望を持って諦めずに（対等に）対話することで初めて生まれる新しい価値があり、それこそが、行き詰まって停滞している地方を前進させ、明るい未来を切り拓く唯一の方法なのではないかと考えています。

先述の県知事への提言（2023年12月）を受け、富山県は、多くのCLD高校生を受け入れている私立高校の入学料・授業料無償化を進めることを発表し、県教育委員会はこれまで議会などで「ニーズがない」とはね除けてきた夜間中学の設立に向けて、ニーズ調査を開始しました。市民性教育を進めて成長してきたCLD青少年の声が、少しずつ地域に影響を及ぼし始めているのを実感しています。これからも、多様な住民による多様な住民のための地域づくりを進め、誇るべき・愛すべき「私たちのふるさと富山」をつくっていききたいと思います。